平和な時代に野球ができる幸せ

野球を想い守りつづけた人々

夏の甲子園大会が始まる季節になりました。楽しみになさっている方も沢山いらっしゃることと思います。

高校野球を含め、日本の野球には戦前、弾圧された歴史があることをご存じでしょうか。現在の日本の野球は、戦争に翻弄されながら、受難時代にも野球を守ってきた先人たちの努力のうえにあります。

巨人軍の球団代表を務められ、現在は野球史の研究に注力されている山室寛之さんに、戦前の野球の受難時代から、戦後の野球復興の歴史、野球の魅力などをお話しいただきました。

弁護士

髙畑　拓

たかはた　ひらく

第一次野球弾圧―野球害毒論―

山﨑　野球は、戦前も人気スポーツだったようですが、弾圧の歴史があるようですね。

山室　戦前の野球の弾圧史は三つに分かれます。始めは明治四四年の野球毒害論です。野球は頭を悪くする、脳に異常をきたす、絶えず塁を盗むことを考える巾着切り（スリ）に等しいなどという記事が東京朝日新聞に大々的に出ます。これに対して読売、東京日日新聞などが反論するのですが、結局大正四年に、大阪朝日新聞が全国中等野球大会をつくって、第一次の野球弾圧はひとまず終息しました。

高畑　なぜそのような弾圧をされたのでしょう。

山室　まだ渡米など難しかった明治四四年に早慶両校野球部が同時に渡米しました。そんな豪華特典に対する批判から始まったようです。

山室寛之さん

野球史家。1941年北京生まれ。1964年3月九州大学文学部卒。4月読売新聞社入社。97年9月東京読売巨人軍代表補佐、98年6月巨人軍代表、01年10月読売新聞社総務局長、03年6月読売ゴルフ社長。

巨人軍代表として2000年のＯＮ決戦を体験。

著書に「野球と戦争」（中央公論新社）「プロ野球復興史」（同）「巨人Ｖ９とその時代」（同）「背番号なし　戦闘帽の野球」（ベースボール・マガジン社）

共著に「われら野球人」（ベースボール・マガジン社）「阪神大震災の教訓＝検証・建造物はなぜ壊れたのか」（第三書館）「今新聞を考える」（日本新聞協会研究所）など。

第二次野球弾圧―野球統制令―

山室　次の弾圧は昭和七年の野球統制令です。当時野球は大変人気でした。昭和六年には、大リーグとの対抗試合が開催されます。日本にはまだプロ野球はありませんから、これには学生野球の有名な選手が出場しました。それに対して文部省が、学生選手はプロ野球選手との試合に出てはいけないという「野球統制令」をつくるんです。

瀬川　学生野球が盛り上がりすぎたということでしょうか。

山室　そうですね。中学校の選手争奪戦が激しく、六大学の優勝祝賀旅行が世界一周、という状況でした。歯止めが必要と考えたのでしょう。

ですが、「大日本東京野球倶楽部」が渡米する際、沢村栄治ら（注1）が自主退学して遠征に参加、大リーグとの試合に臨みました。

野球統制令は戦後まで生きることになります。

第三次野球弾圧―戦時学徒体育訓練要綱―

山室　次は昭和一八年の戦時学徒体育訓練要綱ですが、これが最大の弾圧です。昭和一八年、愛知県政調査会が新聞に、親欧米的な競技は米兵に対する敵愾心を弱める、野球はアメリカが起源だから野球は禁止すべきだと発表します。愛知県は当時の野球王国です。すると「文教の振興と挙国体制強化」のために組織された内政部が、すぐに各中学へ、野球をやめさせろとの通達を出します。そこからだんだん中学野球がやりにくくなっていきました。

三月二九日には文部省が戦時学徒体育訓練実施要綱を出す。球技でできるものは、闘球（ラグビー）だけだとされ、野球は除外されます。

それからどんどん弾圧が激しくなって、中学の野球は禁止される。プロ野球選手は兵隊にとられてしまう。大学・中学から選手を確保しないといけないのですが、これもできない。野球はどんどん先細りしていくわけです。

高畑　一八年二月から三月にかけての文部省の動きが日本の野球を決定的に衰退させたのですね。

山室　当時の文部省体育局体育振興課長の話ですが、野球は欧米の競技であるし、万事派手過ぎると。戦時中でも六大学の選手はハイヤーで神宮球場へ通っていたんです。

当時の日本は、「挙国一致」の戦争体制を作るための新体制運動が巻き起こっていて、パーマは駄目、エレベーターは駄目、そういう時代です。その中で野球選手だけは赤の派手なストッキングを着たりしている。それが非難の対象になったのです。

戦時下での野球

弁護士

瀬川　宏貴

せがわ　ひろき

山﨑　戦前にはできていたプロ野球は、戦時下でどんな様子だったのでしょうか。

山室　産業戦士という言葉をご存じですか。国家総動員法を使い軍需工場などへ徴用した一般人を産業戦士と呼びました。

そして、プロ野球の使命は、銃後にある産業戦士たちを慰楽することにある、野球の試合をやって産業戦士を励ませば、それだけ軍需産業等の生産が増える、こういう論法をとっていました。

そのプロ野球も、シーズン終了後はどうするんだということになります。第二次大戦まっただなかの昭和一八年には、ペナントレース終了翌日に、巨人を含めた東京四球団の選手は東芝の川崎工場に真空管の見習い工として勤労奉仕に出かけて二カ月間働く。今だったら優勝したら大騒ぎですが、当時は野球が終わってすぐ、国防色の戦闘帽をかぶって軍需工場で働いたのです。そういうことをやって野球は命を長らえた。それが昭和一八年のプロ野球です。

瀬川　そんな状況下で実際に野球をやっていた方はどんな心境だったのでしょうか。

山室　川上哲治（注2）さんから直接話を聞いたことがあります。戦地へ行ってどうせ死ぬんだから命ある限り野球に打ち込もうと思っていたそうです。みんなそうだと思いますね。特攻で鹿児島県の鹿屋から飛び立った名古屋軍の石丸進一さんが残した最後の言葉は「俺は野球だ」絶筆は「敢闘精神日本野球ハ」で途切れます。

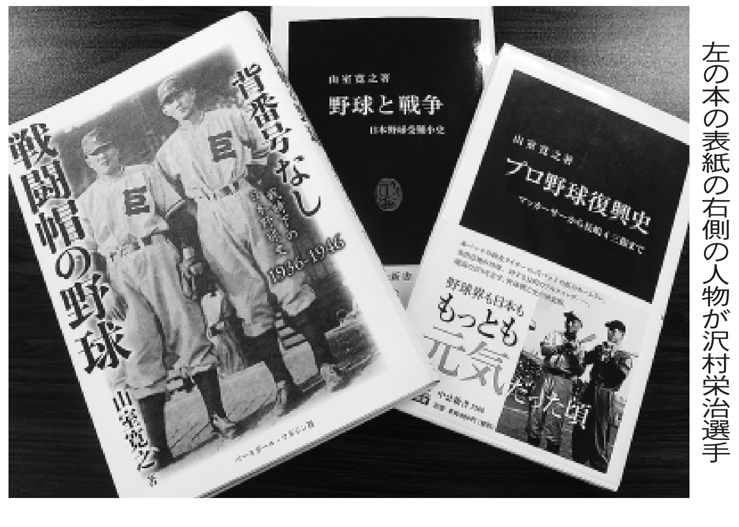
山﨑　戦時下、野球は弾圧される一方、国の都合で推奨される場面もあったのでしょうか。

山室　学徒動員された野球選手たちが動員先で野球の試合をやっているケースは結構あります。軍部からプロ野球選手をフィリピンに派遣してくれという申し出もありました。現地の軍隊が現地のチームと試合しても勝てない、日本が偉そうに振る舞うためには勝たなきゃいけない、だから野球選手を出してくれないかと。プロ野球はシーズン中でできないと断りましたけどね。そんな風に宣撫工作として都合よく利用されることはありました。

瀬川　沢村選手も宣撫に利用されたのでしょうか。

山室　沢村選手は、三回も軍に召集されました。それはやっぱり軍部の宣伝です。召集されれば沢村栄治といえども戦地に行くしかないという。彼は新聞の取材にも応じています。「手榴弾投げれば鉄腕六十米　漢口戦へ沢村投手登場」という読売の記事は代表例です。

上半身裸の彼が、元気に戦地の様子を語っている。他にも岐阜商の優勝投手の戦死や野球選手の受傷も軍が公表した。国民への宣撫と思いますね。



左の本の表紙の右側の人物が沢村栄治選手

戦後の野球

瀬川　戦後、野球はかなり早く再開されたようですね。

山室　戦後の野球再開には諸説あります。

鈴木惣太郎さんと市岡忠男さん（後の巨人軍の代表）は終戦前の七月三〇日に既にプロ野球再開を語り合った。鈴木さんの日記にちゃんと書かれている。

後の高野連会長である佐伯達夫さんは、八月一六日に朝日新聞に直接乗り込んで、早く野球を再開しろと言っています。

九月二三日の朝日新聞の朝刊に当時の東久邇内閣参与の大佛次郎さんが、まず戦場で死ねと教えられた学生に考え方を変える転機を与えるべきだ、そのためには文化的スポーツの復活がまず大事だと話しています。大佛さんは相当な野球ファンです。

そして戦前の立教教授ポール・ラッシュが、九月二六日にGHQ民間情報局の少佐として着任します。彼も野球が大好きですから、着任早々、私に魔法が使えるならばすぐにでも神宮と甲子園に大リーグを連れてきたいと語ったことが朝日新聞に載ります。終戦一カ月後のアメリカ将校の発言ですから影響力が大きい。野球選手たちがこれを読んだときどのくらいうれしかっただろうと想像しますね。

そこから野球への応援歌のようなものがバーッと出てくるんです。九月二八日には一刻も早く六大学野球を復活させようという話し合いも行われています。

一〇月二九日には学生野球の関係者が、野球統制令を撤廃してくれと申し入れ、統制令がやっと撤廃されます。

一一月一八日にはオール早慶戦が行われ、同月二三日には神宮球場でプロ野球も行われます。

高畑　完全復活ですね。ですが、まだ人々の生活は厳しい時代ですよね。

山室　昭和二一年には西宮球場で全国中等野球大会が復活します。そのときには各校とも地元から米持参です。ところが満員列車で運ぶ途中や駅の待合室、さらに、宿舎に着いても盗まれる。そういう時代なんですね。野球用具も本当にない。レガースなしのキャッチャーがたくさん出場していました。

そんな中でも開催されたのは、野球への想いなのでしょう。食料は大変貴重な時代でしたが、早く負けたチームが勝ち残ったチームに米を置いていく、そんなこともあったようです。

弁護士

山﨑　大志

やまざき　たいし

野球の魅力・野球独特の「間」

高畑　弾圧されても野球を楽しみ、そして、戦後すぐに野球が復活していく。日本人を突き動かすほどの野球の魅力はどこにあるのでしょうか。

山室　各種団体競技で両チームの全員が一度に競技場でまみえないのはおそらく野球だけです。サッカー、ラグビー、バレーみんなが同時にフィールドで対峙する。

ところが野球だけは、ベンチに座って見ている。それが野球のいわゆる独特の「間」、考える時間をつくっていると思うんです。試合の間に選手同士で会話もゆっくりできる。と同時に、見る人も会話ができるわけです。一球目は見送ってほしいなとか、隣の人と話し合ったりすることができるでしょう。

高畑　そうですね。そこは野球観戦の醍醐味ですよね。

山室　もう一つは、絶妙のグラウンドルールですね。例えば、塁間の距離は二七・四三一メートルです。イチローは内野安打で沢山ヒットを稼ぎました。一塁ベースがあと一〇センチ遠い、あるいは近ければイチローのヒットはどう増減したか。足は速くない強打の巨人阿部は？これが本当におもしろい。

瀬川　変化球もあの絶妙なバッテリー間の距離があってのことですよね。

山室　さらに、アメリカでは野球は民主主義の象徴と言われています。ヘラルド・トリビューンが、日本に民主主義を浸透させるためには野球が一番と書いた社説を二〇年九月二八日に朝日、読売が紹介しています。

民主主義の根幹は常に自由と平等です。当時の野球は時間制限がない。ボールはフェアである限り、どこへ打ってもいい。時間、空間を自由に支配できて打順も平等です。

打てない選手でも打順がくれば打席に立つ権利と義務がある。強打のガキ大将でも打順を無視できない。まさに平等があり、そこからルールを守る規範意識が身につく。

攻撃中にベンチで、おまえ打てよ、頼むぞと言えば、お互いに協調精神や思いやりを学ぶ。

民主主義に必要な事のすべてが野球にある。

だからこそ、二四年に3Aチームを率いて来日したオドール監督（元大リーガー）は「野球少年に不良はいない」と断言したのです。

そういったものが、アメリカの象徴だと。それと同じことが日本でもいえるんでしょうね。

山﨑　民主主義と自由と平等、そんな観点で野球をみたことはなかったです。とても興味深い視点ですね。

一九六七年頃の高校球児

名選手の至言

高畑　野球の魅力は本当に沢山ありますね。

山室　いろんな方がいろんな話をしています。

川上さんは、毎日一〇分の一ミリ守備範囲を広げれば、二〇〇日で二センチ広がる。そうすれば三遊間を抜ける打球を二センチの差ではたき落とせるようになる、これを「球際に強くなれ」という言葉で表現した。

長嶋茂雄さんは引退のときに、細いバットで小さなボールの芯を打ち抜くことに人生をかけてきたと言った。

王貞治さんはピッチャーとバッターは一期一会の世界だと。目の前を通過するボールはそのボールしかない。同じボールは同じ状況で二度と来ない。だから魂を込めて打つんだと話す。

先日のイチローの言葉もしびれますよね。自分の中にある秤を超えなきゃいけないんだと。あれはやっぱり苦労した人じゃなきゃ言えないですね。今の政治家には絶対言えないな。

松井秀喜選手は、ピッチャーが投げる球はコントロールできない、だからどんな球がきても自分のスイングができるようにスイングを積み重ねて精神を落ち着かせると。

うまい野球選手というのは本当にいい言葉を生み出しますよね。それもやっぱり野球の面白さとどこか通ずるところがあると思うんです。

野球の今後

瀬川　野球の未来はどのようにお考えですか。

山室　実は、私は野球の将来を心配しています。野球は用具が必要で、しかも用具の値段が非常に高くなっている。野球を富裕層のスポーツにしちゃいけないと思うんですね、何としても。

野球は球を投げ、打ち走り、捕る競技です。ボールは大きく軟らか、バットは太く軽い。そんな真似事なら、幼稚園や保育園でもできる。その遊びにお母さんを加えて母子で野球になじめるように考えないと…。

そうでないと、将来は暗いと思います。富裕層しかできないスポーツになれば、少子化のこの時代に衰退していきますよ。今の野球のおもしろさというのは本当に永遠に続いてほしい。野球界は危機を深刻に認識すべき時でしょう。

高畑　日本は並外れて豊かだったわけでもないけれど、野球が本当の意味で根付いている数少ない国ですよね。やっぱり大切にしていかないといけないと思います。

山室　野球は取材していけばいくほど面白い。実に奥深いですね。

……

注1　昭和19年戦死。昭和22年彼の名を冠した「沢村賞」が創設、以来先発完投型の年間最優秀投手に贈られている。背番号14は巨人で初の永久欠番となった。

注2　昭和13年巨人入団、昭和31年には2000本安打選手の第1号となった。赤いバットを使用したことから「赤バット」と呼ばれて活躍「打撃の神様」と称された。引退後、巨人の監督に就任し、チームを9年連続の日本一に導いた。